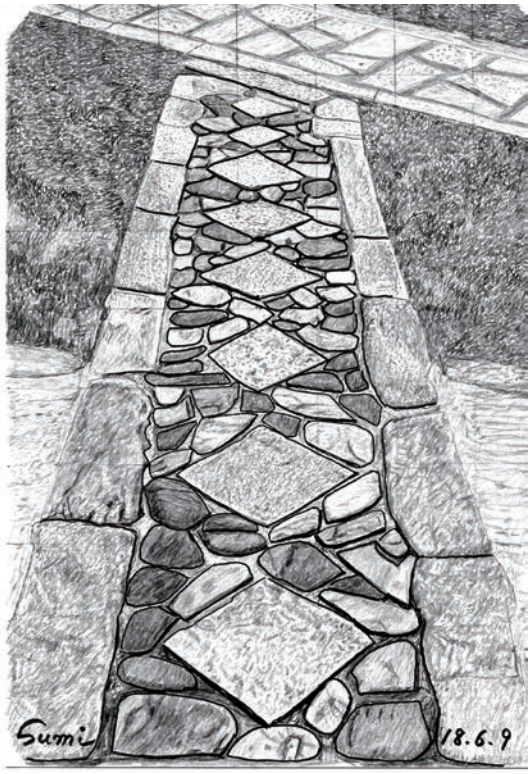
連載エッセイ 9

「同窓会」から「井筒俊彦」まで

小橋 澄治（こばし すみじ）
京都大学名誉教授

年１回開催される大学教養部時代の同窓会に出席する。当然、皆、私と同年配で、客観的に観察すれば、80 歳を超えたおどろおどろしいジジイの集会である。7、8 人から十数人の出席があるが、皆、顔見知りだけど、ご氏名を散会までに思い出せない人も複数居る。そんなことは余り気にしないが、相互に実のある会話を交わすことがかなり大変である。それは勿論高齢者に付きまとう「物忘れ」のせいである。とっさに出てこない「固有名詞」のせいで、話題のテーマからして理解できないことになる。双方、もたもたと話をしている内に別のジジイが全く関係のない話題で割り込んでくる。ということで一見和やかな時が流れていくようだけど、何の話か分からぬまま、話の起承転結がないまま、時は過ぎる。加齢と共に酒量は低下するようで、深く酩酊する人もなく、高齢ジジイ独特の勝手気ままで、突然「俺は帰る、サイナラ」の一言で、退席する人が増え、2 時間ほどで散会になる。ごくあっさりした会ではある。

皆さんご高齢であるから、年々歳々、あの世にお旅立ちの方々は増え、公式記録（？幹事の記録）でも三分の一を越え、未公認（ご遺族が幹事にわざわざ連絡していただける方が稀だろう）を含めれば半数を越えるだろう。大げさでなく、一期一会の会ではある。たまたま隣り合わせになった、剛毅でちょっと煩い男が、いやに弱気な言葉を漏らし、返事に困って、なんとなく気になっていたら、翌年の会を待たずに亡くなった例もある（誰にも言えなかった）。幹事が来年の開催予定を話題にすると、皆、シュンとして、文字通り「来年の事を言えば鬼が笑う」を実感する。結局、話が通じなくても、それはどう



でもよいことで、お互い顔を合わせれば、とにかく、「ご無事で何より」とある種、納得することで十分だと思う会である。

ついでで恐縮だが、ほぼ同時期に「武居先生をしのぶ会」が開催された。先生には 15 年間お仕えした私だから、率先、お手伝いすべきだと思う間もなく、有能なる後輩たちにより万全準備され、私は冒頭、ご挨拶しただけである。若い後輩たちも大勢集まり、大変盛会であった。私も若い後輩たちと久しぶりに懐かしい会話を楽しんだ、と思った。しかし後で考えるに、先生がご定年退職されたのは約 30 年前であり、最も若い後輩でも現在 50 歳後半の筈で、大部分は既に定年を迎えられている人々の集会であった。自らの歳を忘れて、幻想の中の時間を過ごした訳である。

この種の会合に出席すると、「おまえ、毎日何をして暮らしているのか?」という、皆さんの率直な疑問に答える必要がある。80 半ばのジジイの生き甲斐については、若い人ほど不思議に思うだろう。「夫婦二人の食事係として、買物と炊事を行い、掃除もする。あと散歩とお絵描きと読書と、」とモガモガ言っているうちに誰かが割り込んできて話は終わる。

年老いたイヌ、ネコを観察するに動物は年をとっても、衰えゆく体力が許す範囲で、目一杯活動するようになっている。人間も同じで、当面やるべきこと、やれることで、ほぼ満足し暮らせるようになっているようだ。

料理は上達しなくても、コンビニやスーパーの既製品の驚異的充実でカバーできつつある。だけど、夕食の一品ぐらいは自力調達しないと「主夫」でなくなる。近年、京都全区に人間が溢れ、散歩のついでに便利な行き付けのうどん屋までしばしば満席状態で、京都の観光振興に好ましいけど、不便である。掃除は、愛すべきルンバ（こいつは生きている！）と鈍重なダイソン（ジジイにはちょっと重い！）で差し当たり十分である。

散歩は年と共に走行距離、速度共顕著に低下しつつあるが、完全停止までまだ時間がある、と楽観していたが、体重増大という思わぬ課題が現れた。20 代には 50 キロ未満の「ガリ公」で、それ以降 58 キロをずっと維持してきた筈が、正月過ぎに目ざとい主治医に 65 キロに達していることを発見された。人生終盤において最高体重に達するのはカッコ悪い。昼食にコンビニの若者向けチャーハンというのは廃止し、かつ散歩戦略の練り直しが必要である。

お絵かきは全く進歩がないが、描くことをやめようとは思わない。描いている瞬間が楽しいからである。出来るだけ細密に、正確に事物を写し取る、単調な作業に耐えられる力は加齢と共に増えるようである。私の無意識の深層域に現れる妄想的図形は加齢と共にマンネリ化し、新しい形態が次々に現れることはないが、それでも楽しい。とにかく、お絵かきは無念無想（居眠りに落ちていくのもしばしば）で無為に時を過ごすのに最適である。

●

読書は全くプライベートな行為で、何を読んで、どれだけ理解したか、他人さんにはうかがい知れない。年と共に読書量は低下しつつある（これも居眠りのせいである）が、それでもなるべく難解そうな本を選ぶ。今、流行の小説や解説書は面白いけど、どんどん読めてしまって、すぐ忘れて、本だけ溜まり、始末に困るからである。

最近、マルクス・ガブリエル（1980 年生まれの若さ！）の「なぜ世界は存在しないのか」を読んだ。いや、1 回読んだけど、世界は存在しないという理由が何となく判ったような気がするだけで、もう 1 回読む必要と興味がある。いわゆるポストモダン以降といわれる哲学書はさっぱり判らず、諦めて敬遠していたが、この本でちょっとは理解できるかも。

この種の哲学書で私が秘かに好きなのは、井筒俊彦の「意識と本質」である。この人は東洋哲学、イスラム哲学から、ロシア思想、実存主義等々まで研究対象とし、数十の言語に堪能なスーパー哲学者である。なにが好きかといえば、その文章力である。難解な話を平易に表現し、すらすら読み進められる文章が好きである。といってすらすら理解できるかといえば、ノーである。すぐ忘れるけど、また読みたくなる本である。

「本質と存在」、「表層と深層」、「空と無」といった日常性に乏しい世界、だけど歳を重ねるにつれて、チラチラと垣間見ざるを得ない世界に引き込まれるのである。最近、彼の全 12 巻の全集が完成されたようだけど、今からそれに取り組むべきか、完読するには間に合わないだろう、それにしても高価すぎる、もっと楽な本で気楽に暮らすべき、とかウダウダしている。

（イラストも著者）